かささぎ 通信 第24号

2014年6月13日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

会誌「かささぎ」に合わせ、今号からタイトルを「かささぎ」としました。

二〇一四年五月の「森三郎の作品を読む会」では、昭和七年十二月号初出の次の二作品を読みました。

「タニシ太郎」（筆名　八潟　豊）

「お染」（森三郎）「森三郎童話選集　かささぎ物語」所収

「タニシ太郎」は昔話の「申し子譚」のパターンの話です。森三郎はすでに「竹馬与市」でも「小さ子」の話として、「申し子」の話を作っています（「森三郎の作品を読む会　通信第12号」で報告）。また、「柏野大納言」の後半部分は、たまたま牛車に落ちてきた男の子を、清水の観音様に願をかけて授かった申し子として育てる話でした（「同通信第13号」）。

ところがこの「タニシ太郎」を読み終わった時、「なんだか中途半端な感じがする」という感想が出ると、同感の思いで、皆で大爆笑となりました。おじいさん・おばあさんの、子どもが欲しいという切なる願いで、タニシが二人の子どもになったこと、そのタニシ太郎が年貢米を載せた車を馬に引かせ、一人で庄屋さまの家に連れて行ったこと、その庄屋の三番目の娘と結婚したことまでは、「申し子譚」の形式に則っています。ところが、最後の最後までタニシはタニシの姿のままで、しかも姿が消えてしまい、お嫁さんは泣き泣きおじいさん・おばあさんを助けて働くという結末なのです。動物から人間の姿に変わることもなく、幸せな結婚生活でめでたし、めでたしでもないことが、昔話のパターンと違い、中途半端な感を抱かせたわけです。しかし、森三郎さんは、「申し子譚」シリーズともいうべき先の二つの話とは違う庶民の幸せについて書きたくなったのではないかと、ふと思いました。私たちは思わず笑ってしまったけれど、森三郎さんは、せっかく授かった働き者の息子がいなくなってしまった家庭の哀感を描こうとしたのではなかったかと、第23号で書いた昭和八年という時代性を鑑みて想像したりしました。ちょっと穿ちすぎでしょうか

報告

「森三郎の作品を読む会　通信第23号」で、筆名・中村吉麿の作品「堺騒動」について、4月の「森三郎の作品を読む会」の報告をしました。

その中で、微に入り細を穿つ切腹の場面の描写は、森三郎さんのこれまでの描写とはあまりにかけ離れているという感想を述べました。でも、原作が森鷗外の「堺事件」なら、陸軍軍医としての科学性を重んじる立場として納得できるものの、森三郎さんがこの作品を選んだ理由にいささか腑に落ちないものを感じたことを報告しました。

ところが、「赤い鳥」復刻版〈日本近代文学館・一九七九年初版〉の執筆者索引で「森三郎」作品を確認していく作業の中で、酒井晶代氏（現・愛知淑徳大学教授）から、『「＝森三郎」と表記があっても、「ほぼ他者（多くは三重吉でしょう）が執筆した作品」が混在している可能性も否定できません。』というご指摘をいただきました。そして、「堺騒動」についての違和感についてお伺いすると、なんと、この作品こそまさに、「中村吉麿」名義を森三郎ではなく、鈴木三重吉が使用していた例であることを教えていただきました。酒井晶代氏が修士論文執筆のために、一九八八年、森三郎さんから直接お聞きしたことだそうです。

酒井氏は『多くの掲載作に施されたであろう三重吉の加筆も含め、「作品＝個人の著作物」という近代的な価値観ではとらえきれない部分があることが、「赤い鳥」研究の難しさでもあり、面白さでもあります。』と、言っておられます。

これで、森三郎さんのイメージと作品との関係は、壊れずに済みそうだと、一件落着の思いです。これからも刈谷の地で、「森三郎」作品を地道に読み込んでいけば、そこから「森三郎」像と、森三郎さんが作品を通して伝えたかったことが見えてくるのではないでしょうか。

◎　次回予定　7月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年2月号初出作品

「うんすんガルタ」・「笛」（「森三郎童話選集　夜長物語」所収）